



## ハードルで学んだこと

加藤 梨沙  
かとう りさ

佐倉市立印南小学校六年（千葉県）

運動が好きかと聞かれたら、好きだと即答します。何故かと言うと、陸上大会と、その練習があったからだと思います。

私は陸上でハードルに努めていました。幸運なことに選手になり、毎朝、痛いくらい冷たい中で、必死に走り続けました。

ハードルに足をひっかけて、激しい音をたてて転んだことなんて、数え切れないほどあります。でも、倒れ込んだ冷たい地面から立ち上がって、「転ぶことがスポーツ 痛いことがスポーツ」と前向きに考え、また転ぶ、その繰り返しが私の根性の源であり、そして長続きの秘訣だったと思います。

大会当日、六年女子のハードルの招集がかかり、あと数分で本番でした。昨年のことを思い出し、犯したミスを恨みながら、でも前向きに、ハードルが九台並んだレーンをしつかり見据えています。

気が付けば、自分は先頭。「お願いします」と声を張り上げました。心臓がつぶれる、ああもうだめだと思った瞬間、あの音が弾けたのです。自然と体は前へと進み、一台目、二台目、難なくクリア。隣の人よりも速い、入賞できなくてもいいから新記録を出そう、そういう心の中で誓いました。

けれど：最後の台を跳んだとき、嫌な予感がしたのです。気が付けばハードルに足が絡まり、地面に落ちてしまいました。一瞬の出来事だったけど、一瞬で理解できました。転倒した、と。最後の最後で、昨年と同じく、レース中の誤りでタイムすら出せなかったのだ。立ち上がり、あの線をまたいだ時には、もう涙で前が見えず、その場に座り込んでしまいました。

足が痛いと感じ始めたのは、しばらく後でした。情けなくて、もうどうしようもなかったのです。今思えば、あの時走り切れたのなら、この足一本折れても惜しくありません。

救護室で冷された足に、また辛くなりました。情けないし、悔しいし、それに今まで応援してくれた家族や友達に、胸を張りありがとうと伝えることができないと思いました。ぼうつとしていると、窓から今まで一緒に走ってきた友達の姿が見えました。大声で応援してあげようとしていたのに、私にはなんにもできなくて、本当に申し訳ないと思いました。

応援席に戻ると、みんな口々に「大丈夫？」とたずねてきました。心配そうにまゆをひそめてくれる友達の姿に、また涙があふれそうでした。思わず顔をそむけました。その後、母が来て、色々話をしてくれました。少し乱暴な手つきするときもあって、文句を言うとしたけれど、せっかく優しくしてくれているのにだめだと思いい、その言葉を「ありがとう」に変えました。

あれからずいぶん経ちましたが、今でもあの努力は忘れていません。あの悔しかったミスも、今では良い思い出です。何故って、それが今の頑張りに繋がっているからです。

「転ぶことがスポーツ 痛いことがスポーツ」という言葉を胸に抱きながら、今でも走っています。あの時の汗と涙を、いつまでも大切にしていきたいです。